



優 秀 賞

設計部門



設計部門

作品概要

作品名—— TRI-7 ROPPONGIと天祖神社のランドスケープ
 所在地—— 東京都港区六本木7丁目7番7号
 発注—— ベンローク・リアルエステート・ジャパン・エルエルシー
 設計—— 愛植物設計事務所
 設計協力—— 竹中工務店東京本店(建築設計)、光井純アンドアソシエーツ建築設計(外装コンセプトデザイン)、内原智史デザイン(照明計画)、八島デザイン(サイン計画)
 監理—— 愛植物設計事務所
 施工—— 竹中工務店東京本店
 設計期間—— 2011年01月~2014年03月
 施工期間—— 2014年04月~2016年03月
 規 模—— 敷地面積 約4,800㎡
 主要施設—— 事務所・店舗、神社および関連施設

作品評

本作品は、海外デベロッパーと由緒ある神社が一体となって行った開発事業で、5年間という業務期間を経て、現在も植栽管理の監修者として参画している。
 計画地での景観形成が持つ広域的な意味、都心独特の多彩な表情を持つ周辺空間との親和性、こうした課題にしっかりと応えた作品である。特に、周囲のまちづくりとの関係性に注力され、多彩で、良質で、心地よい空間が生み出されている。こうした結果は、緑の質を評価する東京都の「みどりの計画書」で最高ランクを取得したり、SEGESによるオアシス認証を受けたりと、外部からも高い評価を受けている。駐車場と化していた境内を、地域に向けて開いた境内広場としたことで、地域コミュニティの拠点ともなっている。写真を中心に構成された資料は、コンセプトが明快で解り易く、優秀賞となった。



(左頁) TRI-7と神社の間に創出した「龍灯の杜」①秋に行われた例大祭は氏子や地域の方々で賑わう ②森とビロティが一体に設えられた「フォレストプラザ」 ③盆踊りを想定した広い境内広場と神社の縁起木サトザクラ「福祿寿」 ④変電施設躯体を活用した池を眺める親子

TRI-7 ROPPONGIと天祖神社のランドスケープ

株式会社 愛植物設計事務所

山野秀規・山本紀久・丸山英幸・中井理佐子(故人)・渡邊幸太・田中秀樹・倉田香織

本計画は、世界中で優良な不動産の長期的な開発・運用を得意とする TRI-7 の事業主と、江戸期から続く神社とが共同で行った開発事業です。

計画地は、東京ミッドタウンや新国立美術館といった大規模

施設の「先進的なエリア」に隣接する一方、小規模で高密度な市街化が進んだ「昔ながらの六本木の街並み」にも面した場所に立地しています。

TRI-7 事業主は、この両面性を活かしながら『ここならではの良質な外部空間を設えること』、また、ビルユーザーや自然が極端に少ない周辺地域のために『自然な雰囲気の植栽を可能な限り行うこと』の2つを強く求めています。

一方、この地で江戸期から続く天祖神社は、かつての町名「龍土町」の由来にもなった由緒ある神社です。周囲の市街化と

もにマンションや雑居ビルに囲まれ、通りからは存在がわからないほどのビルの谷間に位置し、境内地の狭さから催事にも制約が出るなど、将来的な神社のあり方を考える上で大きな課題となっていました。

そこで、ランドスケープ計画では、由緒ある天祖神社と TRI-7 が各々の事業を尊重しながら、一体的な外部空間と緑を創出・共有することでお互いに利益を享受し、かつ各々の街の様相に見合った外部空間と緑によって多面的な街を繋ぐこと、をテーマとしました。

具体的には、①境内広場と一体的な外部空間と木立、②電線地中化に伴う変電施設躯体を活用した池と森、③巨大な壁面緑化によるビルの谷間の圧倒的な緑量の空間、などを創出し、年

月を経て街が抱えていた諸課題を改善しながら、ここならではの外部空間を構成しました。

植栽は、周辺のかつての土地利用で見られた様々な緑をモチーフに、神社の社叢に見立てた樹林や境内苑、雑木林、庭園木などのほか、都市的な並木や人工地盤緑化、壁面緑化といった現代的な手法を組み合わせ、限られた空間の中に多様な形態で緑を配しました。

現在では、双方の街並みに面した低層部の商業テナントもオープンし、ビルユーザーだけでなく多くの来訪者も自然な緑の中でゆったりと過ごされています。また、今秋には竣工後初めての例大祭が行われ、広く使いやすくなった境内広場に多くの地域の方々で賑わいました。